

野球チームにおける環境デザインとしてのコーチング Coaching in baseball as an environmental design

福山敦士, 諏訪正樹
Atsushi Fukuyama, Masaki Suwa

† 慶應義塾大学環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University
t07677af@sfc.keio.ac.jp

Abstract

This paper presents an on-going exploration about how coaching in team sports should be. Based on a 1.5-year effort to lead a baseball team in a university, we argue that interchange of voices among players and the coach is a significant element to be designed intentionally.

Keyword —meta-cognition, coaching, team sports communication, chemistry

1. はじめに

筆者が学生コーチとして所属する慶應義塾大学準硬式野球部は平成 21 年度東京六大学春季リーグ戦において優勝した。57 年振りの快挙である。本論文は、チームスポーツにおけるコーチングとは“雰囲気”作りであり、環境デザインであると主張するものである。筆者が学生コーチに就任して 1 年 4 カ月の間、良い雰囲気を作るための実践的実験を試み続け、3 位から 5 位の間を低迷していたチームを優勝に導いた過程で、どのような環境デザインを仕掛けたのかを振り返り考察する。

2. コーチングにおける“雰囲気”の重要性

コーチと選手、選手同士の関係性は、チーム内の円滑なコミュニケーションや各人のモチベーションに影響する。そしてコミュニケーションやモチベーションは雰囲気によって測ることが出来る。従来コーチングは、コーチが選手の潜在能力を引き出すことやモチベーションを高める手法など、技術的な側面について語られることが多かった。しかし、現場でのコーチングは、コーチと選手の関係だけに閉じた話ではない。選手間にはレギュラー争いがあり、対戦相手がいることも、コーチ

ング手法を考える上で重要な要素である。コーチ、選手、及びそれらを取り囲む環境の相互作用すべてを考慮に入れてコーチング手法を模索しなければならないと筆者らは考える。様々な相互作用の出力として生まれ、更にその後の相互作用への重要な入力になるものが、“雰囲気”なのである。

人間と環境との相互作用は状況依存的であり、客観的な立場からは記述しきれない。そこで本研究では、コーチと選手、選手同士、そしてそれらを取り巻く環境との相互作用をメタ認知的に内部観測[1]し、雰囲気を作るための実践を行った。

3. 部の体制と学生コーチの役割

慶應義塾大学準硬式野球部は現在 55 名の部員を抱える。筆者はこのチームの学生コーチとして、練習メニュー決め、試合の指揮・采配を任されている。一般的には監督が行う業務であるが、自チームの監督は社会人でありグラウンドにあまり来ることが出来ないため、学生コーチである筆者がその責任を持つ。

4. コーチングの重要ポイント

1 年 4 カ月に及ぶ実践から得た洞察の中で、本論文では以下の 2 つのポイントに絞って議論する。

●声のやり取りを促す環境デザインが重要

雰囲気作りの重要変数は声であることを実践から発見した。発声はその場の雰囲気に影響を及ぼすのは当然であるが、効果はそれだけではない。選手間で声のやり取りをすることで相互作用が生まれ、選手同士の信頼関係が築けることが“雰囲気”を生むのである。選手同士の声のやり取りを促す機会を提供することがコーチの重要な役割である

という知見を得た。

●コーチングはコミュニケーションである

コーチングはコーチが選手に一方的に教えることではない。コーチが何らかのアクションをすれば、選手や選手を取り巻く環境が変化・反応する。それを見極めて次なるアクションを生むことが重要である。例えば対戦相手が弱小チームであると選手が考えだれている場合、下手に盛り上げようとしても元々緊張感のないチームにはお遊び的な雰囲気が生じる。そんな時は逆に緊張感を煽るのがよい。ただ勝つのではなく「10点差をつけて勝たないと練習場まで走って帰らせる」というプレッシャーを与える。状況や選手の反応、雰囲気を的確に判断し、アクションを仕掛けることが良いコーチングである。それは正にコミュニケーションである。

4. 実践

4.1 実践的実験

良い“雰囲気”作りを試行錯誤的に模索する過程で内部観測的に書き綴ったノートは16冊に及ぶ。筆者の実践で特筆すべきは、ミーティングの数である。全部員が集まる日は土曜と日曜しかない。平日は授業や就職活動などの関係上、練習を途中で抜ける選手・途中から参加する選手は少なくなく、選手間にすれ違いによるコミュニケーション不足が起りがちである。それが、プレーに対する選手間指摘を減少させ、単純な指示や確認作業を怠らせ、更に、グラウンドでの声のやり取りを妨げる原因になっていた。筆者は、その状況を打破すべく以下の環境デザインを試みた。

- 土日の試合後に学年毎のミーティング（計14回）と、ポジション別のミーティング（計16回）を実施
- 雨の日は学年・ポジション関係なくランダムな小グループでのミーティングを実施（計3回）特に後者は、少人数で普段コミュニケーションを取る機会の少ない選手同士の場として機能した。数多くのミーティングの導入が、リーグ戦期間中（4月～5月）の“良い雰囲気”の保持に貢献し、

優勝の一因であったと考える。

4.2 選手の反応

リーグ戦終了後、選手達にリーグ戦を通じてのレポート「チームや自分が昨年と比べてどう変わったか？」を課した。選手の反応の実例の一部を以下に示す。

K選手：「自分が一番大きいと思うのが、監督・コーチ・主将への信頼。キャプテンや福山の話をもんなしっかり聞いていること。当たり前かもしれないが、チームのまとまりはまずこういうところから生まれるんじゃないかなと思う。」

S選手：「まず変わった点として、一つはチームが何ごととも曖昧で、すべてが緩い同好会的な集団から、目標を明確にし、めりはりをつけた戦う集団に変わったと思う。」

Y選手：「入りの徹底ができています。日本一のベンチワークができるようになってきた。雰囲気がいい。キレる人がいなくなった。チームが本当に好きになった。（キャプテンと福山への信頼やチームメイトのおかげ）」

5. 今後の課題

今回の選手のレポートに見られる「信頼」という言葉は、筆者が意図していなかった反応である。信頼関係が重要であることは分かるが、それがどんなことなのかはつきりとは分からない。信頼関係を如何に築いていくかをこれからの課題とし、今後もこのチームを対象にメタ認知的な内部観測を続け、コーチと選手、選手同士の信頼関係を模索していく。

謝辞

本研究の一部は、財団法人日産科学振興財団（2008年度特別研究課題）の助成によるものである。

参考文献

- [1]古川康一編著、植野研、諏訪正樹他著. (2009) スキルサイエンス入門—身体知の解明へのアプローチ（7章：pp.157-185）, 人工知能学会編, オーム社, 2009年3月